土木学会第52回年次学術講演会（平成９年９月）

Ⅳ－221

傾斜住宅地の街路景観に関する研究

住宅都市・整備公団　正会員　池田　元
立命館大学理工学部土木工学科　正会員　笹谷　康之

1. はじめに

近年の日本の傾斜住宅地の開発は、大規模な土地造成によるものが多く、既存の地形や自然が破壊されるような開発が行われている。しかし、住宅地の魅力を向上させるためには、地形や自然を生かし、いかに計画していくかが重要な問題である。そこで本研究では、質の高い住宅地として評価されている芦屋市六麓荘を事例にあげ、傾斜住宅地の街路景観とその魅力を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

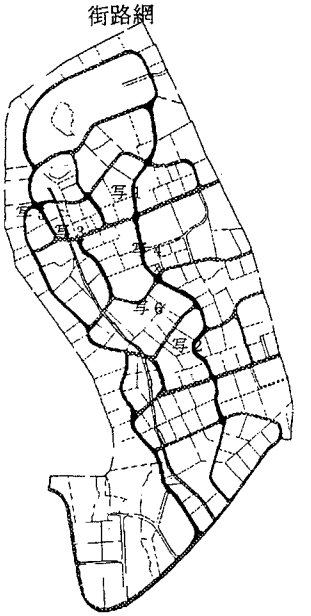
街路景観を構成している街路曲率半径、街路幅員、街路勾配および街路網を、芦屋市道路台帳（平成８年３月）と現地調査などから抽出し、街路景観を評価する。

3. 芦屋市六麓荘の地勢と開発経緯

六麓荘は芦屋市の東北部に位置した、海抜100～200mの立地条件である。また、六甲山の麓にある六麓荘は、六甲山との境界にあり住宅地としては、かなり急勾配である。開発以前は国有林であったため、開発当時から数十年経つ現在でも、アカマツや花崗岩などの自然が点在する地でもある。

六麓荘は、苦楽園や香櫨園などに影響をうけ、大阪の財界人が中心となって、「東洋一の別荘地をつくる」ことを開発コンセプトとして開発された。環境の良い、大阪を一望できることも、開発地として選ばれた理由である。

街路網



4.　六麓荘の街路景観の特徴

等高線と平行した勾配のあるのぼり街路では、写真１のように、目線が路面に向かい、囲じょう感が感じられるが、くだり街路では、写真２のように、眺望が開け、開放感を感じさせる。

六麓荘の街路は、写真３のように直線区間が多いが、尾根や谷の地形の起伏に沿って、曲線的な街路が多く、ときには折線的な場合もある。

等高線と直交した六麓荘の街路は、勾配が８％以上と大きく、数値からは圧迫感を受けそうに感じられる。しかし、写真４，５からわかるように、曲率半径が大きく、視距が広がり、街路幅員が大きく、擁壁・塀の高さが比較的低かったり、植物や自然石のようにソフトな材料だったり、区画が広く間口が大きかったりすることによって、勾配の割には圧迫感を感じさせない。

街路勾配が大きいため、写真２，６のように、くだり街路の多くの場所では、市街地や海の眺望が楽しめる。

keywords:　傾斜住宅地　街路曲率半径　街路幅員　街路勾配　街路網
池田　元 :〒525 滋賀県草津市野路町 1916 立命館大学理工学部土木工学科 Tel0775-66-1111(内線 8771)

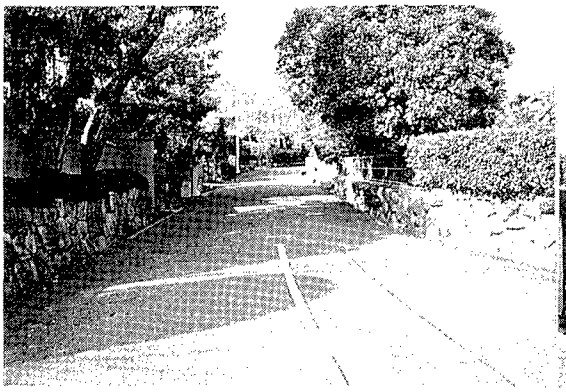


写真１.等高線と垂直なのぼり街路
勾配 9.5％ 幅員 7.2m 曲率半径 25m

写真２.等高線と垂直なくだり街路
勾配 11.3％ 幅員 7.4m 曲率半径 26m

写真３.等高線と平行なくだり街路
勾配 3.9％ 幅員 7.4m

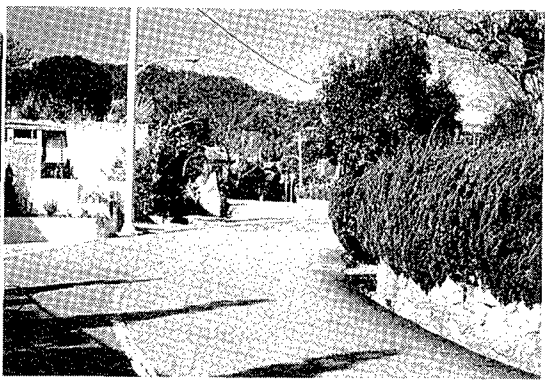


写真４.圧迫感を感じにくい街路
勾配 11.3％ 幅員 7.4m 曲率半径 26m

写真５.圧迫感を感じやすい街路
勾配 7.6％ 幅員 5.5m 曲率半径 15m

写真６.眺望が楽しめる街路

5. おわりに

自然地形に順応させた街路網を持つ傾斜住宅地では、雄大な眺望、変化に富んだ多様な街路景観が生み出されることがわかった。このような住宅地では、一般的に望ましくないとされる８～12%の街路勾配でも、魅力的な街路景観が生み出されていることが明らかになった。よって、無理に造成して街路勾配を小さくするより、やや急勾配でも自然地形に順応した街路設計が必要だと考えられる。